



The Y's MEN's CLUB of

★  
もりおか



<VOL136.2019.4>

もりおかクラブ事務所：〒020-0804 盛岡市本町通3丁目1-1 Tel 019-623-1575 盛岡YMCA内  
盛岡YMCA HP <http://www.ymcajapan.org/morioka/> 検索エンジンワード「盛岡YMCA」

「主題」

国際会長	Moon Sang Bong (韓国)
アジア太平洋地域会長	田中 博之 (日本)
東日本区理事	宮内 友弥 (武蔵野多摩)
北東部長	涌澤 博 (仙台青葉城)
もりおかクラブ会長	三田 庸平

「私達は変えられる」  
「アクション」  
「為せば、成る」  
「チャンス到来、我ら北東部から世界へ」  
「繋がりを大事に、見据える世界の扉」  
副題「ワイズの明るい未来を見つけましょう！」

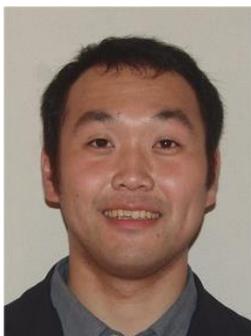
今月の聖句 申命記8章17節

 「あなたは、「自分の力と手の働きで、この富を築いた」などと考えるてはならない。」

会長	三田 庸平
副会長	長岡 正彦
書記	濱塚 有史
会計	大関 靖二
担当主事	浅沼 慧 (しどう)
	中村 渉 (チャン)

5月定例会のご案内  
日時 令和元年5月10日 (第2金曜日) 18時30分  
場所 盛岡北ホテル2F。 会費 2,000円  
第二例会、5月17日(第3金曜日) 18時30分より 各自  
場所 じょ居 (駅前通り)

### 三田会長 巻頭挨拶



三田会長

平成がまもなく終わろうとしています。寂しさを感じます。桜がきれいに咲き、あつという間に散り始めているのも寂しく感じます。桜のピンクに心が癒された気がします。東日本区大会・アジア太平洋地域大会がすぐそこまで来ています。ワクワクとドキドキで楽しみです。

もりおかクラブからも参加し盛り上げられたらと思っています。もりおかクラブは少人数で、会員増強に貢献できているとは言えないのですが、現会員の維持も大事にしながら元気あるクラブにしたいと思います。

SNSの利用に関しても話にはまだしていませんが、SNSというツールをうまく利用して会員増強・クラブの魅力を伝えられたらと思っています。笑って過ごせる時間を大切にしたいと思います。

### 4月定例会の報告

平成31年4月13日(土) 盛岡、北ホテルにて開催、参加者、、三田会長、井上メン、大関メン、井上優子、山口メン、魚住メン、中原陽子、濱塚メン、浅沼担当主事(敬称略)。 ゲスト、尾河芽生さん(ビリケンリーダー)、東彩由美さん(マックスリーダー)、齊藤七穂さん(おむすびリーダー)、加藤 淳さん(南部片富士印、大豆「秘伝」生産者以上11名の参加で開催されました。

インドスタディツアーの報告をして頂きました。スケジュールに沿った形でインドの方々との交流について話していました。インド国内での電車での移動時間の長さにはまず驚きました。しかしその手段を選んだガイドさんの狙いにも驚きでしたが、それに応えてインドの方々との交流を自ら実行したビリケン、マックス。見学をした寺院では、裸足で入らないといけない所もあり、しっかりと管理されている事を実感。

様々な子供たちとの交流も行われ、キャンプで培われた引き寄せる力を見事に発揮してきたようです。

カースト制度のもと、苦労があることも知りましたが、現状を受け入れ元気に生きているのだなと感じました。



乾杯です、今月もよろしくお願いいたします。



集合写真、ビリケンが目立っています。

## 盛岡YMCA新人生歓迎会

「4月になると盛岡YMCAは」。おお、このフレーズはサイモン&ガーファンクルの、「4月になると彼女は」のフレーズにそっくりです。そうです、4月になるといよいよ活動開始です。盛岡YMCAのボランティアリーダー会は岩手山の岩鷲に乗って大空へ羽ばたき始めます。

4月6日、14日の2回に渡り、盛岡市内の新大学生を集めて新人歓迎会を開催いたしました。リーダー会長は「ビリケン」副会長は「マックス」二人を中心に、各大学の新生を勧誘しまくり、6日は60人、14日は40人の1年生を集めました。YMCAという組織を全く知らない学生、Yっ子だった学生、リーダーの後輩など、いろんなタイプの学生が集まりました。6日はまだ寒かったので内丸教会内でのプログラム、14日は暖かくなり岩手公園を使ったプログラム、どちらも楽しく活気に満ちた歓迎会を開催いたしました。直接新人と接触して活動しているリーダーたちの腕の見せどころ、YMCAへ集う学生をたくさん集めて下さいね。

お食事は、豚汁と野菜のナムル、そして富士宮やきそばです。もりおかワイズからは、三田会長、井上メン、魚住メン、長岡メン、会場を提供してくれた、中原陽子牧師(メネット)のご協力により順調に準備ができました、って、嘘ですよ。裏方はドタバタの喜劇のようでした。先輩リーダー、YMCAのスタッフをあわせて60人と予想していた6日はなんと90名に膨れ上がり、料理が足りません。豚汁を2倍に増やす、間に合うのか？焼きそばのキャベツが足りない。調達に走るリーダー、それでも足りないのはお

菓子でフォローしましょう。14日は反省を生かして、準備万端で開催できました。焼きそば100食を短時間で焼き上げるのは体力勝負でした。魚住メンの協力で頑張って焼き上げました。

その後のYMCAのサッカースクールには早速5名の新人リーダーが参加してくれています。連休中のリーダー研修会が開催されて新人たちの顔ぶれが確定します。若者たちの前向きな行動に触発されてワイズのおじさんたちは年をとる暇が無くなりそうです、新しい年の始まりはいつも心がウキウキします。頑張れ新人たち、それからもりおかワイズのみなさん今年もフォローよろしくお願いいたします。



内丸教会の講堂に溢れんばかりの学生達。



# 「フリテン盛岡DAON」



### もりおかクラブの状況報告

4月の出席率	8/14	57 %	ゲスト3名	ビジター	メネット2名		
メーキャップ	1	名		4月切手	0 g	累計	333 g
4月のにこにこ	17,000	円	累計	円	4月プルタブ	0 g	累計 22,350 g
4月 石鹸	0	円	累計	3,610 円	りんご	0 円	累計 17,010 円
4月 献金	0	円			ファンド合計	17,010 円	

会費の納入をお願いいたします。岩手銀行 松園支店(店番号 082)普通口座 2145674

もりおかワイズメンズクラブ 会計 大関 靖二

4月のハッピーバースディ 4/8 三田庸平さん 4/11 濱塚真美メネット 4/16 山口律子メネット  
お誕生日おめでとうございます。

## 東日本大震災アーカイブス、2014年5月掲載

### 震災直後、気仙沼大島の奮闘

先月、今月と気仙沼市を訪れ大島へのフェリーが再開されているのを見て、「ああ、そうだ大島は震災直後の火災と戦ったよね。」思い出しました。当時の大島住民たちの奮闘を紹介します。

まずは唯一残った連絡船ひまわりの津波との格闘から、その



後の大島住民が火災と戦うための援軍を運んだ船です。大津波の爪痕が残る宮城県気仙沼市の離島・大島の海岸で1隻の

火を消さねば、頼むひまわり連れてってくれ。小さな船が係留されているのを見た。大島の震災の記録を残す活動をしている大島宝島委員会の堺健会長が「あれが島を孤立から救った臨時船の『ひまわり』ですよ」と教えてくれた。大津波に挑んで生還し、島民の足代わりを果たしたという『ひまわり』。それは島の人たちには、希望の灯りだった。船長の菅原進さん(69)は、遠洋漁業の仕事をやめたあと大島と気仙沼港を結ぶ夜間の臨時船としてひまわり(42人乗り)を運航。帰宅が遅くなり定期便に乗り遅れた人たちが40年以上も貴重な足として利用してきた。堺さんが発行している大島絆新聞によると、大島の崎浜に住む菅原さんは、地震後、家族を高台に避難させ、ひまわりに乗って沖を目指した。浜に係留しておいたら津波にやられると考えたからだ。しかし津波は菅原さんの想像を超えるもので、富士山の高さを感じるような海の壁が何回も船を襲ってきた。後ろで転覆する知り合いの船が見えた。菅原さんは「おい、ひまわり、頑張れ、お前が死ぬときは俺も死ぬ時だ」と励ましながら、大波と格闘を続けた。津波は後ろからも襲ってきた。岸にぶつかって跳ね返ってきたのだ。波に平行にならないよう操船し、がれきや網などにも注意した。やっと波が収まったが、夜になると大島と気仙沼が火事で真っ赤に見えた。翌朝、ようやく島に戻ることができたが、大島汽船



のフェリーは津波で陸に打ち揚げられ、島は孤立していた。島を救うには多くの人手がいる。菅原さんは津波から2日後の13日、ひまわりの昼の運航を始めた。

行きも帰りも荷物と人でいっぱいになり、バランスを取るのが大変だった。一日2往復の予定が4往復の日もあり、津波で亡くなった遺体を火葬するため、気仙沼に運んだこともある。フェリーも後に広島県のフェリー会社の協力で広島からきた船を使って運航を再開した。ひまわりの運賃は被災者を無料、一般はフェリーより安い片道300円で、この分は義援金として寄付しているという。堺さんはひまわりと菅原さんについて、大島絆新聞に「島民は菅原さんの勇気と温情を忘れない」と記している。

大島から気仙沼に働きに来ている大人たち、学生たちは大島の山火事の連絡に、いてもたっても居られなかったのです。そこへ「ひまわり」の登場、「よし、後は俺たちに任せろ、大島人の意地を見せてやる。」戦力が整い始めようとしています。その頃、大島では、消防士と消防団、残った住民が不眠、不休、空腹で

の消火作業は、人間の活動の限界が近づいていた。山火事が、気仙沼大島の最高峰である亀山の山頂を越えた。消防士の13人と、消防団員(50人)で島にいたのは約30人だけである。山火事は消しても、消しても、飛び火して他に移り、なおも燃え続ける。炎は野獣とおなじで人間に襲いかかってくる。「火は敵だ。この野郎、止めてやるぞ」消防士は山腹を駆けまわる。不眠不休の消防士たちの疲労は極致でも、消火をやめられない。「ここが終わったら、あっちの消火もあるんだよな」湾内から水を取り、20mホースを20本以上つなぐ。400メートルの長距離送水である。山林の樹木がじゃまして、ホースは簡単に伸びない。大島は孤立し、消防署の食料備蓄すらもなくなった。空腹でも、食べ物を探して走りまわる余裕などない。死闘だった。島人が炊き出しで、おにぎりを持ってきてくれる。そして、消火活動を手伝いたいという。「住民がいくら助けたいといっても、住民には危険なことはさせられない。ケガ人を出したら、負けなんです」消防士は何度も断る。1か所を消しても、転戦(てんせん)で、次なる場所へと400メートルのホースをくり出す。大島の山火事の特徴は、地面を這って燃えていることだった。火の粉が飛ぶ火災ではない。それだけに舗装道路は、火を食い止めるには最も良い場所である。「おらたちが防火帯を造る。火が来ていない山の地面を、あらかじめ掘る、削るだ。」それは住民の提案だった。山の特徴からすれば、燃える樹木や草を切り取り、地面をむき出しにすれば、火炎はそこで止まるはずだという。2車線の林道に沿って、5車線、6車線に相当するベルト地帯を山中に造る作戦だった。「この作業なら、住民は火炎に巻き込まれず、安全だと判断しました」消防士は語る。住民、ボランティア、企業の人、なかには中学生たちもいた。全員が力を合わせた。島を全焼させないと、土壌をむき出しにしておく防火帯づくりに懸命になった。消防士としては民家の手前で、放水で建物を守ることに専念できた。消火活動を始めてから初日、2日目と、稜線や林道を防火地帯として守り続けた。しかし、山火事は魔物である。火は強風にあおられ、稜線の一か所を破った。盲点となった観光リフトを伝わり、山裾野に降り、島の南部へと移る気配が濃厚になってきたのだ。大島の中央部は太平洋側と気仙沼湾側と2か所からの大津波に襲われている。そして、島は北と南に分断されている。繁華街が津波の通り道(海峡)になり、家屋、家具、車、船などガレキの山である。それらはほとんどが可燃物だ。「島の南側まで、類焼させるな。火が来たら、3200人の島民の逃げ場がなくなるぞ」それは島民の恐怖だった。本州からの援軍はない。まさに、袋のネズミ状態に陥る。島の中央部のガレキに燃え移れば、火炎の勢いを増す。横転した車はガソリンだし、漁船は軽油だから、引火すれば、火力のが勢いは強まる。「津波の通り道だが、ここを最後の防火帯にしよう」

住民たちが総出となった。津波は一度だけではない。余震が来るたびに、津波に襲われる。これも、命がけの活動だ。島の



南に燃え移ったら、命が危ない、という重大さがわかっている。そ

れで手伝った人もいるし、それで恐怖をかきたてられて消火に加わった人もいる。「最悪でも、島の中央、津波の通り道は渡さない。」住民たちは家屋や家具や衣類のガレキの撤去作業をはじめた。「数人が津波を警戒し、見張っていました。津波が押し寄せてきたら、ピーと笛を吹くんです。ガレキの撤去作業を中断し、全員で山腹の高台に逃げました」津波が引いたら、また可燃物のガレキ撤去を行う。「陸に打ち上げられた漁船を下ろして、島民が全員で船に乗り脱出など考えましたか」私は消防士に、その質問を向けてみた。それは素人考えだと判った。島の周囲は家屋や家具やイカダがびっしり詰まっている。海岸には隙(すき)間などなかったという。「陸から船を海に降ろせたとしても、浮かぶ家の屋根を越えて沖に出られません」「ガレキを押し開けて水路ができたとしても、津波が四六時中襲いかかってくる海です。船が転覆する危険性が高い。あるいは太平洋の遠方に流されても、(消防庁、海上保安庁、海上自衛隊など)海上捜索の手などどこもありません。膨大な犠牲者を出すだけです」津波が襲来する海に、小型船を出すなど自殺行為だと理解できた。真向いの本州・気仙沼では、石油タンク20数基が炎上し、火の海だ。船がたどり着ける港などないのだから。まさに、島民は逃げ場がなかったのだ。「山火事は絶対に島の中央部で止める。そういう信念だけです」人員、物資をひまわりが運んだ。

## 復活、いちご大福「一心堂」

明治橋もとにある「一心堂」が復活していました。このお店は大福の専門店、いちご大福が有名でした。閉店してもう17年



店構は昔のまま、のぼりは新調です。

もたっていました。先代の息子さんが定年退職のあと、店を再開したとの事、1年半も気が付きませんでした。行ってきました、いちご大福を買ってきました、食べました。大粒のいちご

## 編集後記

一週間前「石割桜」開花のニュースから間もおかず、市内のソイシノが次々の開花、一昨日と昨日の雨で、強制的に花びらを落とした盛岡の桜です。桜の下にはピンクの歩道が続いておりました。寒くて開花が予想より5日遅くなり、一気に暖かくなった途端、全ての春の花が咲きました。



神戸ポートクラブ、大野勉さん来盛、飲みました。

大野さんと、大関さん、もつきりをお替りしてごきげんです。

がんばれ、大島島民。自分たちの島を、町を、家族を守るんだ。かけがいのない命を守れ。火事と人間の闘いだ。4日間の死闘の結果、山火事は鎮火した。それは3月17日午前11時3分だった。「どんな心境でしたか」私は質問を向けてみた。「雪が降っていたのはよく覚えています。雪上で座り込みました。疲れたではなく、終わったのか、という気持ちでした。映画のラストシーンに、自分がいるような光景に思えました」「住人から感謝の言葉で、いまでも記憶に残っているものは?」「70代の女性から、『神様を燃やさないでありがとう』と感謝されました。寺の住職からも、火から守ってくれてありがとう、と言われました。田舎ですから、神仏を大切にしている精神があるんです。それらの言葉がうれしかったです」火災との死闘で、当座の大島は守れた。その安堵の後を訊いてみた。「消火活動以外のことは殆どわかっておらず、家族はどうなっているのかな、とそちらの不安に襲われました」取材に応じてくれた、29歳の消防士は地震発生の日から、22日間の連続勤務だった。その後、休みの日には行方不明の母親を探しに出かけ、4月9日に、ご遺体を発見されたのだ。**日本財団ブログマガジン参照、穂高健一ワールド参照**

先日、島と本土を結ぶ橋が開通しました。そのニュースを聞きこの大島の特集を思い出し再掲載いたしました。

を餡と餅で優しく包み、なんとも言えない食感です。美味しくいただきました。いちご大福の他にも、キウイ大福、パイン大福、クリームチーズ大福もありました。発送が大空へ飛び出して居るようです。好きな、たかはし団子が閉店してがっかりしたのは3年前、ぶちょうほう饅頭は開いている時間が短かすぎて手に入らない、バスセンターが無くなり、はちみつたこ焼きも手に入りづらくなっていく中での、一心堂復活営業はとても嬉しいです。例会などの行事に差し入れしますね、本日(27日)早速ユース委員会に10個差し入れしました。美味しく食べてくれたかな。

自転車でも市内を走ると、車からの映像では気が付かない良いお店が結構あります。私が良い店と思うのは、ノスタルジアを感じる店です。もっと、もっと盛岡を奥深く発掘して行きます。



アイドル、カモシカの「モシカ」と「モニカ」が徐々に登場してくれました。こちらに気づいて、じ〜と見つめています。何もしないから仲良くなろうと思っても通じません野生ですから。ざんねん。



28日朝。2日間の雨は山では雪でした。化粧直しの岩手山

改めて、美しいお山です。大好きです。では、また来月。

